

熱演が続くSPACE×DRAMA2003。どの劇団の公演も大盛況です。
今回は、後半4劇団の公演のご案内です。1年間にわたって準備を進めてきた、
このSPACE×DRAMA。ぜひお越しください。

me-te-lui-lui××× 楽園。

■作・演出：山本セリ
■公演日時
8月12日(火)19:30※、13日(水)14:30、18:30
※終演後、アフタートークあり
■料 金
夜公演：前売2000円／当日2300円、ペア：前売3000円／当日3500円
昼公演：前売・当日共通1500円
■チケット取扱
me-te-lui-lui×××、應典院
■劇団連絡先
TEL/FAX072-239-6891

劇団アクスピ OUT OF THE HOLE

■作：堤俊樹 演出：堤俊樹＋石井テル子
■公演日時
8月26日(火)19:00、27日(水)15:00※、18:30
※終演後、アフタートークあり
■料 金
前売2000円／当日2500円
高校生以下：前売1000円／当日1500円※高校生以下は要学生証
■チケット取扱
劇団アクスピ、チケットぴあ、應典院
■劇団連絡先
TEL090-9217-9916・FAX075-353-9033

特攻舞台Baku-団 トゥルーフェイスとオンド

■作：水本剛 演出：Baku-団マスク
■公演日時
9月2日(火)19:00、3日(水)13:00※、17:00 ※終演後、アフタートークあり
■料 金
前売1500円／当日2000円
レスラーマスク着用者半額(着用の上、ご観覧下さい)、現プロレスチャンピオン無料(要証明)
■チケット取扱
特攻舞台Baku-団、應典院
■劇団連絡先
TEL090-7550-8726

満月動物園 SaD⇄SaD～サドサド～

■演出・脚本：戒田竜治
■公演日時
9月9日(火)FP18:30、AP19:30※、10日(水)AP13:00※、FP15:30、FP18:00、AP19:00
AP=actors performance(60min)、FP=film performance(15min)、※終演後、アフタートークあり
■料 金
AP：前売¥1800・当日¥2000、FP：前売・当日共¥300、AP・FP共通：前売・当日共2000円
■チケット取扱
office M. C. S.、應典院
■劇団連絡先
office M. C. S. TEL・FAX 0742-35-9469

全公演共通パスでもっとSPACE×DRAMA体験!

7公演をすべて1回ずつ鑑賞できる、お得な「全公演共通パス」発売! 友人との共同使用も可能です。

【発売期間】 5月12日(月)～8月31日(日) 【料 金】 1枚5,000円(税込)
※限定50枚 詳しくは應典院まで

【新入会員ご紹介】

(2003年8月9日まで)

前号以降にご入会いただいた方です。ありがとうございました。

○個人会員

【大阪府】

片岡春樹 高槻市
河本雪夫 大阪市都島区
上田敏幸 和泉市

【京都府】

三輪敦子 京都市左京区

サリュ VOL. 39

應典院寺町倶楽部のニュースレター

発行日 2003年8月10日
(偶数月発行)

編集長 川井田祥子

スタッフ 池野亮、大塚郁子

発行所 應典院寺町倶楽部

〒543-0076

大阪市天王寺区下寺町1-1-27

TEL06-6771-7641

FAX06-6770-3147

Salut

應典院寺町倶楽部のニュースレター

vol. 39

サリュ

フランス語で救いの意



6月19日、「いのちと出会う会」が30回目を迎えた。これまでのゲストはホスピス医、僧侶、NGO・NPO職員、看護師など多彩で、参加者は通算822名にのぼる。いのちにじっくり向き合う時間を多くの人と共有した3年間だ。

第30回のゲスト本田哲郎神父は「痛みや苦しみを共感することが慰めであり、思いを共有し一緒に響きあうことが励みだ」と語った。

生老病死について真摯に考える人々とともに、今後も会をつくりあげていきたい。

2003. August

一人ひとりがクリエイティブで、

公共の場を創造する担い手に！

「ワイガヤ文化」を取り戻し、学びと実践が連関する場を創ろう

第37回寺子屋トーク「大阪リバイバルと人材育成～価値創造の都市再生を考える」が、5月26日に開催されました(ゲスト:汐見稔幸さん<東京大学大学院教育学研究科・教育学部教授>・佐々木雅幸さん<大阪市立大学大学院創造都市研究科教授>、コーディネーター:弘本由香里さん<大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所客員研究員>)。当日は平日にも関わらず、大阪再生やまちづくりに関心のある行政マンや企業人、学生など102名の参加がありました。佐々木さんが教鞭を執っておられる「大阪市立大学大学院 創造都市研究科 都市経済政策研究分野」に在籍する社会人大学院生も、ほぼ全員が自発的に参加して下さり、自分の学びをどう実践に活かしていくべきか、大いに刺激を受けたようです。その中の3人の方々に、当日の感想を含めてお話を伺いました。

“大学院”は新たな模索とチャレンジ

——今日は、今年の春に大阪市立大学が設立した社会人大学院の、院生の方々に集まっていたきました。まずは、自己紹介をお願いします。

井上●神戸市役所に勤めています。中小企業の支援施策やニュータウンのまちづくりなど、さまざまなことを担当してきました。「このあたりで自分のやってきたことをふり振り返り、整理して前進したいな」と思ったのが、大学院へ行こうと思ったきっかけです。

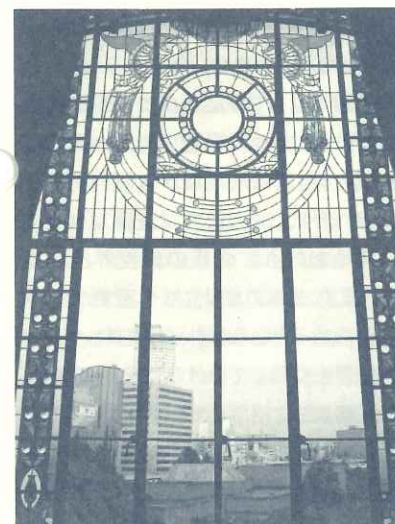
でも実際に入学してみると、ますます広がったというか混乱してきて、整理ができない状態なんですね(笑)。ただ、それはけっして不快な状態ではなく、むしろ心地よくて……ちょっと自分でも不思議なんですけど、それならいっそ、どこまでバラバラにできるかを半年ぐらいかけてやってみたいなと思っています。

中村●大阪商工会議所に勤務しています。いまは地域振興部に所属していて、

都市の再生やまちづくりに関わるのが主な仕事です。会議所に入ってから経済政策や産業政策、人材育成などに関わり、昨年からの部署になったんですが、大阪を活性化させるためにどこから手をつければいいのか、最初は皆目わかりませんでした。そんなとき佐々木先生の創造都市論と出会い、「都市再生には、いろんな要素が絡み合っている。きちんと勉強したい」と思い、大学院への進学を志望しました。入ってみると、本当にいろんな視点から考える必要を感じますし、刺激的な毎日を過ごしています。

深尾●私はたぶん、同じクラスの院生25人の中でいちばん特異な存在です(笑)。今年3月末まで八尾市役所の山本出張所長をしていました。私は昭和22年生まれの団塊の世代なんですけど、これからの自分の生き方をいろいろ考えていたときに大学院開設の話聞き、最初は勤めながら院に通おうと思ったんですが、この歳では「両立はしんどいかな」と考え退職しました。幸いなことに妻が賛成してくれ、早期退職制度もあったので思いき

ることができたんですが、人生80年時代、大学院の2年間で学んだことを活かしながら、公務員とは違う立場でまちに関わっていきたいですね。一つの組織にずっといると「井の中の蛙」になってしまうし、入学して多くの人と知り合えたのは本当によかった。お勤めしながら通っている人は、趣味の時間などプライベート



な時間はほとんどなくなるでしょうから、その気力と体力には頭が下がります。

寺子屋トークで発見したもの

——寺子屋トークに参加されて、いかがでしたか？

深尾●ゲストの話は、共感する部分が多かったです。大きくは二つあって、一つは汐見先生のおっしゃられた「ワイガヤ文化の大事さ」、つまり、さりげなく語り合える場の重要性ですね。話を聞きながら私が市役所に勤務していたときのことを思い出したのですが、じつは東山本という小学校区で、定期的集まる日だけを決めてワイワイガヤガヤ話せる場を「まちづくりラウンドテーブル」と名づけてやっています。テーマをとくに設定しなかったのが最初はとまどっていましたが、半年ぐらい経つと安心感が生まれ、約一年たっ



深尾健造さん



井上 淳さん



中村裕子さん

たいまでは、ごく自然に会話がはずむ場になりました。「話すこと自体が楽しい」ってね。その体験があったので、「まちづくり」もまずは自由に話せる関係を築くことからスタートすべき、という考え方を実感として受けとめることができました。

もう一つは佐々木先生が、「学ぶ側の世代や立場が、もっと見えがけんであってほしい」と話されたこと。つまり、学びたくなれば、いつでも学校に行けるようなシステムであってほしい、私みたいに「えいやっ」と仕事を辞めてしまうのではなくてね(笑)。

実際、みんな大変な思いをして学校に通ってらっしゃる。若い同級生がこの前、「時間がなかったの、生まれてはじめて電車の中でおむすびを食べた」と言っていました。そういう厳しい状況の中でしか学べない日本の社会、ゆとりのなさを改めて感じました。本来なら、そういう意欲を職場が認めて休職制度を適用できるようなシステムを社会全体でつくる必要があるでしょうし、そうしなければならぬ時期に日本はなっているのではないかと思います。

井上●私も、ワイワイガヤガヤ、ペチャクチャおしゃべりを、という部分は共感しました。私自身、震災の前後に中小企業指導センターにいたんですが、商店街等の復興や活性化を考えるために、住民の方々にも集まっていたく場面がよくありました。そういうやりとりがたくさんあった所、人々が活発に議論している地域は復興も早かったですね。

子どもの教育に関しても、神戸では淳君事件が震災後に起っていますが、震

◇ご出席のみなさん◇

★深尾健造(ふかお・けんぞう)さん
(1)元八尾市役所職員 (2)『市場の倫理 統治の倫理』(ジエ・イコブス)80歳を超えてこのパワー、見習うべし! (3)カレー(スパイスには少々うるさい)

★井上 淳(いのうえ・あつし)さん
(1)神戸市交通局 総務課勤務 (2)『ボブの秋』(湯本香樹実) (3)うどん

★中村裕子(なかもら・ひろこ)さん
(1)大阪商工会議所 地域振興部勤務 (2)『14歳からの哲学～考えるための教科書』(池田晶子) (3)いかなごのくぎ煮

※(1)職業 (2)最近、感動した本 (3)好きな食べ物

災のときに、大人たちがペチャクチャ話すことを見ている子どもたちは何らかのいい影響を受けていると思いますし、「子どもたちは社会を映す鏡であり、大人の側が反省すべきことは多い」というお話に、とても感じるところがありました。中村●汐見先生が哲学者ハンナ・アレントを紹介しながら仕事に関するお話を





されたとき、職人的仕事を意味する“ワーク”という概念に共感しましたし、みんなが“ワーク”的働き方をすれば、誇りや生きがいをもつことにつながり、そういう人々の増加がまちを魅力的にすると改めて思いましたね。自分の仕事との接点が見つかって、価値を再認識したというか……。

——たとえば、どういうことですか？

中村●2年前、会議所が「大阪企業家ミュージアム」を設立した当初に関わりました。過去に大阪で活躍した企業家、松下幸之助さんなど約100人を選び、たんに彼らの業績を紹介するだけでなく、彼らがなぜ、どのように事業を成し遂げたのか、彼らのチャレンジとイノベーション（革新）によって日本社会はどう変化したかという点に焦点をあてています。訪れた人たちが自身が、いまの社会の課題にどう取り組むべきかを学ぶ機会にしてほしいと考えたからです。志や情熱をもって社会の課題に自発的に取り組もうとする精神が必要なのは起業家だけでなく、会社に勤めている人も学校の先生や公務員、アーティストなどすべての人に必要で、みんながそういう精神をもっていることが真に豊かな社会ではないか。ささやかでもミュージアムは一つの機能を果たしている、と改めて感じられてうれしかったです。

自分とまちの関係は？

深尾●同じクラスの仲間と創造都市論について語り合うとき、少し違和感を感じることがあります。鳥の目と虫の目の両

方が必要なのに、どうも鳥の目の方が多いのではないかと。まあ、大阪市立の大学だから仕方ないかも知れませんが、“オール大阪”のような捉え方だけではなく自分の居住地域で何ができるのか、定点観測的に一人ひとりが真剣に取り組んでいくべきだと、ゲストの話を聞いてその思いを強くしました。

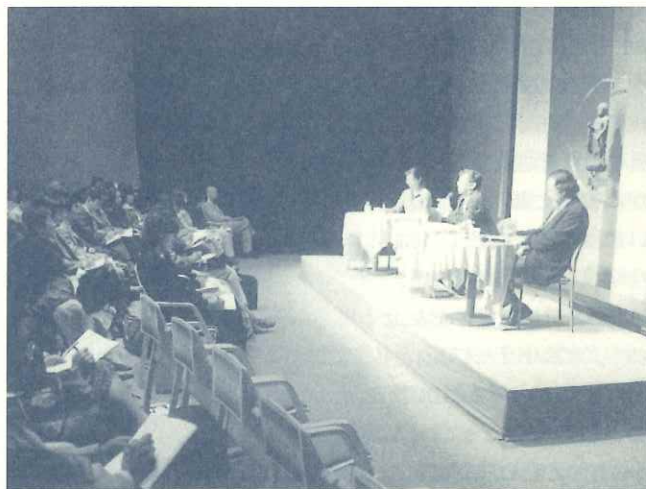
院生25人、それぞれ職業は違っても地域の生活者であるという部分は共通しているので、そういう視点を共有しながらやっていくことが必要ではないか。10年後には4人に1人が高齢者という社会が現実になってきます。誰も経験したことがなくてイメージしにくい状況ですが、いまとは違う社会システムを構築しないと回っていかないという予感がします。お金や物だけで豊かさを測るのではなく、数値に換算できない豊かさを生み出す努力がないと、このままでは本当に悲惨な状況になるでしょう。それを回避するヒントを、この2年間でぜひつかみたいと思っています。

中村●寺子屋トークのはじまる前、空堀界隈をみんなで散策し、新しくできた複合ショップ「練」にも立ち寄りました。人々の思いが凝縮している場所の魅力と言うんでしょうか。思いをもっている人が集まっていたし、すごくいい空間で、訪れた私もすごく心地よかったです。そういう場所がたくさんあるまちは魅力的ですし、大阪をそうしていくことに私は関わりたいけど、実際には枠が大き過ぎますね。自分のできる範囲で行動していく、そういう人々の増加が結果として、集合体としての大阪をよくすることになっていくと思います。

井上●創造都市への取り組みも、しっかり現場としての地域に落とし込んでいかな

いとダメなんでしょうね。都市というものを考えながら、地域をどう経営していくか。「都市経営」という言葉が流行したとき、たとえば神戸は「ファッション都市」だと宣言して、包装紙で包んで飾るようなことをしていました。でも時代は変わって、デパートも包装紙の力が弱まり中身が問われるようになってきたでしょう？ 都市の中のそれぞれの地域を、どう魅力あるものにしていけるか、実力が試される時代になったと思います。

授業では大阪のことがよく例に挙げられますが、地域の経営の仕方は応用できるし、すごく似た地域が大阪、神戸、京都それぞれにあります。たとえば神戸の新開地あたりは、大阪の新世界とよく似ています。まちの成り立ちや歴史など、共通点のあるところをもっと連携して情報や知恵を交換していければいいですね。深尾●まちに根づいている文化や歴史、そこから生まれている職人さんのパワーや創造性などを取り戻すことは、高齢社会の一つのヒントになるでしょう。一日の大半を住んでいるまちの中で過ごすことになるので、地域の中で循環する経済や社会システムを再構築する必要があると思います。しかし、これは、すぐにできるようなものではなく、難問です。でも、寺子屋トークに参加して改めて自分の問題意識との共通点が見つかったし、もっと研究を深めていきたいなと思いました。そういう意味で収穫は大きかったし、コミュニ



ティのあり方をもう少し分析していきたいと思いました。

コモンズは“クリエイティブ”の実践

——今年のコモンズフェスタに、院生の方々が「自主ゼミ」と称して参加してくださいませ。参加の理由をお聞かせください。

井上●「心のままに」と言うか、自分自身の原点復帰でもあるんです。学生時代、学園祭の運営に関わっていたので、当時の自分が抱いていた夢や希望を思い出しながら、最初にお話した、バラバラになっているものを一つでも形にしていきたいと考えています。

私たちのプログラムに来てくださる方には、院生それぞれの“違い”と出会うことができたいですね。私たちの企画はわりと異質なものになるかも知れませんが（笑）、その異質なものとどう交わっていた

だけるか、楽しみです。

深尾●寺子屋トークのときに佐々木先生は2〜3回、「ええかげん」という言葉を使われました。型にはまらないとか自由自在という意味でおっしゃってましたが、機敏に変化に対応するには、やはり「ええかげん」でないと対応できませんよね。「創造都市研究」と言うからには、自分たち自身がクリエイティブでありたいと思っているし、今回のコモンズのプロジェクトも中心メンバーを募ったら、すぐに5人が名乗りをあげました。他にもこういう機会があればと思いますし、私たち自身がワイガヤにと言うか、いろんな個性をぶつけ合いながら一つのものを創っていききたいですね。

中村●以前、秋田さんとお話をしたとき、「コモンズは、核の部分にNPOやアーティストがいて、その同心円状に作品を鑑賞する人や参加する人がいる。それぞれの立場での関わり方があり、同心円の関係を築きながら学び合えるようなもの



にしたい」とおっしゃっていました。一般的にはイベントと言うと、主催する側と参加する側、完全に2つに分かれてしまうものだと思いますが、コモンズはそうではなさそうで興味をもちました。実際にどういう企画になるか、まだ見えませんが、同心円の中に入るとしたら私はどういう関わりができるかなと思って楽しみです。

深尾●他のプログラムの企画者や参加者、演劇人や他大学の学生とも交流しながら、多くの“違い”と出会うことを楽しみにしています。

——どんな企画になるか楽しみです。今日はありがとうございました。

「ええかげん」で行こう

第37回寺子屋トークレポート（まとめ：深尾健造）

基調提言の汐見稔幸氏は冒頭、日本社会全体がひきこもり社会になっており、特異な日本的現象であると言われた。これは、集まってしゃべることの楽しさを忘れてしまったからであり、ワイガヤ文化をどう取り戻すかが日本社会再生の前提作業ではないかと問題提起された。公共の場で公のために議論できる能力をハンナ・アレント(*)は「アクション」と呼んでいるが、さりげなく語り合える場を、まちのあちこちに創っていくかならない。

そうした前提作業を経て、住むことに誇りがもて、夢を生み出すまちを創っていくことができる。夢を生み育むためには職人文化にこだわり、ものを創るおもしろさや楽しさを若い人に伝えていくこ

とが重要である。そのためには、学んだことを表現できる場ができて、みんなが知恵を出し合う場を多くつくる必要で、それがあってこそ、東京の後追いではない大阪の再生につながると結ばれた。

基調提言を受けて、第2部のセッションで佐々木雅幸氏は、創造都市論という若い学問を受け入れる大阪の“ええかげんさ”は、地域の自治にこだわるイタリアの都市に通じるものがある。生涯学習のニーズは確実に増えており、学びの場と実際の社会との相互浸透や、多様な世代がともに学ぶというような、教育制度の“いいかげんさ”も必要だと発言された。最後に両氏は、應典院のような場所と活動の広がりが大阪の再

生に重要であると強調された。

人材育成がテーマのトークセッションだったが、意外と身近なところでワイガヤ文化が衰退していることに気づかされる。もう一度、謙虚にコミュニケーション能力を学び直す必要があるのではないかと。そう言えば、昨年のコモンズフェスタのテーマは「対話のレッスン」だった。ワイガヤ文化の回復が大阪の、いや日本の再生のキーワードであることがいよいよ明白になってきたようだ。

(*)ハンナ・アレント……1906～1975年。政治哲学者。ドイツでユダヤ系の家庭に生まれる。ナチ政権成立後パリに亡命し、ユダヤ人救出活動に従事。その後、アメリカに亡命。パークレイ、シカゴ、プリンストン、コロンビア大学の教授などを歴任した。

「SPACE×DRAMA2003」 7劇団の連続公演、いよいよ中盤戦に！

今回よりリニューアルした演劇祭「SPACE×DRAMA」。7月末の時点で、千年枕と劇団鹿殺しの公演が無事に千秋楽を迎えました。平日公演は動員に苦戦すると言われる中、2劇団ともすべてのステージがほぼ満席となる盛況ぶり。とくに劇団鹿殺しは、昼のステージまで立ち見の出る結果となりました。これから本番を迎える劇団も大いに期待できそうで、その要因として劇団相互の協力による運営体制が考えられます。

昨年10月よりほぼ毎月1回のペースで行ってきた制作会議では、お互いに協力しながら運営するための話し合いを重ね

ました。広報面では5月16日に行った合同記者発表の後、各劇団のネットワークを活かして、複数の地域情報紙や演劇情報サイトへの掲載、公民館・店舗・ライブハウスなどに共通パンフレットとチラシを配布したり、公演当日には設営・受付・撤収を劇団同士で補い合う……といった状況です。演劇祭への参加によって初めて顔を合わせた7劇団が、来年夏の三者協働プロデュース公演の開催資格獲得(1劇団のみ)をめざして、互いに切磋琢磨しながら協力しあう、一つの「共同体」ができあがりつつあると言えるでしょう。

また、今回の新しい試みの一つである

「観劇モニター」は、マスコミの協力を得て一般公募したところ、9名の方から応募がありました。しかも、14歳の中学生から、60歳までの幅広い年齢層の方々です。いままで観た芝居は「新劇」や「伝統芸能」といった大舞台ばかりで、「小劇場演劇」は初めてという方がほとんどですが、まさるな気持ちで観た感想をアフタートークやアンケートで率直に述べてくださるので、劇団にとっては大いに参考になっています。

「初めて同士」の出会いから生まれるものを確実に育んでいくために、劇団・観客・事務局のコミュニケーションを図りながら、9月10日の最終日を迎えたいと思います。みなさまも、ぜひご参加下さい。

Make Up Community

今年4月、大阪市平野区に開所した知的障害者通所授産施設・アトリエインカーブは、いままでの福祉施設とは一風違った、斬新なコンセプトが注目されています。

その運営主体である、社会福祉法人素王会(昨年9月に法人認可)の理事長・今中博之(いまなか・ひろし)さんにお話を伺いました。



——コミュニティな人々 今中博之さん

デザイナーの分野では、徐々に成果は具体化しつつあります。アーティストの分野では、アウトサイダーアーティスト(※)を将来的に発掘していきたい。けれど焦ってはいませんよ。最近のはやりではないけれど、「スローワーク」でいきますよ。それが、私自身もそうだけれど、クライアントのペースなんですよ。社会の流れに逆らわないけれど迎合しない。自分たちのペースを守ってこそ、本当の仕事ができるんじゃないかな。

應典院には注目してますよ。秋田さんは、何か自分と同じ匂いがするんです。王道でなく覇道を歩むというか。秋田さんは宗教に、私は福祉に、いままでまったく専門外の分野から飛び込んだ。だからこそ固定概念を打破して、新しい風を吹き込んでいくことができるんだと思います。

別視する傾向があって、一般のアートとは区別されてきた感があります。他の障害者運動も同様で、「障害者だから……」という気持ちがある。その主体者にも、また社会にもあったのではないかなと思うんです。アトリエインカーブの運営のキーワードは「デザイン」と「アート」。「障害者の」という冠つきでない、デザイナーとアーティストを育成したいと思っているんです。だから、スタッフにはプロのデザイナーや造形作家など、クリエイティブな分野で活躍をする人ばかりで、いわゆる福祉のプロは一人もいません。アトリエインカーブでは、契約した障害者をクライアントと呼んでいますが、そのクライアントの商品や作品を、世界に発信していくことが、我々の使命だと考えています。

※アウトサイダーアート…美術教育を受けてない人が自らの衝動のままに作り出す作品のこと。

いみじくも、アトリエインカーブを開所した今年4月、障害者支援費制度が導入され、福祉を取り巻く環境は大きく変化しています。これまでの行政主導から、障害者がサービスを選択し、サービスの利用者とサービスを提供する施設・事業者とが対等の関係に立って、契約に基づきサービスを利用することになったのです。

素王会(そおうかい)を立ち上げるまで、乃村工芸社という空間デザインを手がける会社のデザイン部に勤務していました。私自身、身体に障害があるので、それまでも福祉行政には無関心ではいられてませんでした。また、仕事柄、障害者アートには大きな関心を寄せていたのですが、何か違和感がありました。

とくに日本では、障害者アートを何か特

最近、まちづくりの活動をはじめて以来、しばしば空堀を訪れる機会が多くなりました。空堀は上町台地に残された古い住居地区で、戦災を逃れた長屋が昔の風情そのままに残るまちとしても知られます。ここ数年前から、建築家の六波羅雅一さんを中心に、長屋再生プロジェクト「からほり倶楽部」が立ち上がり、長屋を再生した複合ショップの経営などが続き、まちの話題を集めています。

古いものを現代に活用するという創意もすばらしいですが、そういう場所に集う人たちのなんと和やかなこと。倶楽部の仲間やお店の店子みなさんも、若い世代なのに、不思議になつかしく、あたたかさを感じます。長屋効果というのか、昔からのまちや暮らしが、人間の胸底にある良心のようなものを引き出してくれているように見えます。

もうひとつは、最初からお金儲けを優先していないこと。大きくは儲からなくても、でもまったくの無償ボランティアではなく、小さな、でも持続可能な仕組みを作り出そうとしている。そこにいつも感心します。

過日訪れた日は、7月7日の七夕。昭和初期に建てられた元蠟燭工場だったという長屋の軒先には、笹飾りが用意され、道行く人が願いごとの短冊を結んでいました。お寺が見習わなあかんなあ、と強く感じました。

■應典院が、第6回なにわ大賞・準大賞を受賞



写真提供：なにわ名物開発研究会・広報部

僭越ながらこのたび、第6回なにわ大賞・準大賞をいただき、去る7月28日、中之島の中央公会堂で授賞式が開催され

ました。この賞は「大阪のいちびり」を顕彰しようと、98年に設けられた賞(主催：なにわ名物開発研究会、選考委員長：作家・難波利三さん)で、毎回、まちづくりや芸術文化、歴史などの分野で活躍した人材に贈られるもの。今回は大賞に、中央公会堂の保存運動で多くの文化人・市民とともに活躍された新家政延さんが選ばれました。

準大勝を、NPO法人長堀21世紀計画の会理事長の成松孝さんとともに、私が受賞しました。立派な受賞者に囲まれ、副賞までいただき、ちょっと恐縮していますが、これからも名に恥じないようがんばり

夏の風物「万灯会」

8月はお盆月、なつかしいご先祖さまがふるさとに帰ってこられる季節です。昨年大蓮寺ではじまった「詩の学校・お墓編」が、今年も8月1日、若い参加者が集い盛大に開催されました。

詩人の上田假奈代さんが主宰する「詩の学校」の面々と大蓮寺の檀家さんも一部参加して、午後6時半開会、まず全員で本堂でお勤めをして、その後住職の法話、午後7時半に墓地に移動して、用意された百の灯籠に明かりを灯しました。本堂では若い参加者の読経の声にも感激しましたが、ふだんは真っ暗な墓地に灯が揺らめく幻想的な光景にもうっとりさせられました。

墓地では、若い詩人たちが、銘々に魂に呼びかける詩作を披露し、お寺とアートのすばらしい出会いの一夜となりました。



秋田住職発

應典院 掲示板

たいと思います。ありがとうございました。

■秋の上町台地は、アーツ色に染まる！

私が代表理事を務める「上町台地からまちを考える会」では、いよいよ9月より本格的な活動を開始、その第一弾が9月28日(日)に開催される「上町台地アートツーリズム」です。このエリアの3つの魅力地である、寺町、空堀、コリアタウンをつなぐ、市民発の新しい観光事業で、当日は自転車に乗った外国人留学生15名が界隈を快走します。

いま大阪は観光立都化を進めていますが、USJや吉本だけではない、大阪の都心の魅力を満喫できる絶好の企画となりそうです。さらに10月から11月には「上町台地アートマンスリー」や「まちの学校」なども連続して開催され、界隈はアート色のにぎやかさとなりそうです。

■エンディングセミナー

秋のシリーズは10月からスタート

好評をいただきました「大蓮寺・エンディングを考える市民の会」主催の「エンディングセミナー」秋のシリーズが、10月2日からスタート、10月は「成年後見制度と在宅ホスピスケア」(2日、9日、18日、25日全4回)、11月には「医療について知る」(1日、10日、17日、22日全4回)をテーマに、それぞれ専門のパートナー団体と共催します。

詳細は次号の本紙でもお知らせしますが、死後の自己決定というテーマについて、また興味深い学習の機会となりそうです。